



教職大学院

Newsletter No.

122

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科 since2008.4 2019.5.18

Contextualizing Tokkatsu Activities in Egyptian Education

(「エジプトの教育への特活の適用」)

Hurghada 1 and 2 Egypt Japanese School (EJS) Principal

(ハルガダ第1・第2エジプト日本学校・校長)

Karima Mohammed Elsayed Shahien

カリマ・モハメド・エルサイード・シャヒアン

*本文の日本語訳は、英文の後にあります。

After the Egyptian Royal Highness President Elsis's visit to Japan, excitement about the Japanese education system were broadcasted in Egyptian media. There were discussions on how the Japanese style of education has scored a unique balance in academic and physical progress, and social and emotional development of its children. There was a call to adopt this characteristic of education into our own Egyptian education system. But I wondered, 'How can this be done? What specifically can the Japanese education system bring into Egypt?' Despite these questions, I was then happy with the decision of the government. I was even more elated to be chosen to be part of the educational experiment known as Egyptian-Japanese Schools (EJS). In one of the trainings, I was asked by a Japanese expert to try to put animals (pets) in our school. It was absurd; yet, I was advised to have them at a spot where students can actually observe them. How? Why? That time, I was just thinking of 'How can we change not only the child's whole character but that of the the entire education

stakeholders community including parents, teachers and administrators?'

And then the opportunity for a month-long training on Tokkatsu Activities and Lesson Study at the University of Fukui came in which I brought my desire to investigate for the answers to my inquiries. What motivates our EJS students to go to schools even during holidays? How are the morning and afternoon meetings, welcome ceremonies, etc. be implemented? I want to understand why our president chose Japan for our educational reform. At the very least, I was more focused on finding out the magic spirit of Tokkatsu and how it is pioneering the world.

内容

巻頭言	(1)
院生 自己紹介	(4)
ミドルリーダー/マネジメントコースだより	(9)
インターンシップ/週間カンファレンス報告	(12)
月間カンファレンス報告	(15)
ラウンドテーブルのお知らせ	(21)
スケジュール・編集後記	(24)

In Fukui, I admired the strong communities of practices that tie the hidden ropes (or lay down the foundation?) of collaboration present in the whole society. The whole society share the common feeling of responsibility towards children. There, teachers are their own communities of practice; parents' team is considered as a main assistant to the entire school. I felt everyone's passion of getting pupils to be always ready to learn even if they failed; this is a healthy phenomenon to learn through trial and error. The University of Fukui team tried hard to put us on that track of learning by action, and insisted to pass over the value of documentation as the corner stone of pedagogy on scaffolding active learning so that we can implement tokkatsu in our respective schools. I was impressed with students who were documenting their performance with full honesty and accuracy. Holding classroom discussions and presentations is a major component to promote independence among students. I also appreciated how they are able to shift any curriculum and content to be part of practice.

After the training, we adapted a simple tokkatsu model focusing on communities of practice here in EJS Hurghada. My first mission was to set up the base school for our community of practice among six schools. The first idea to get everyone on board is to conduct a lesson study on classroom discussion and instructions. To do this, I thought of using the theme, 'imitating the farmer's life and desert's life' for student learning. In this project, we involved the team of teacher and parents, and other stakeholders in brainstorming. The teachers were divided into groups with specific roles. The security and workers in the schools also contributed from the lead of students and their contribution to project. The parents, most surprising of all, supported the whole endeavor to ensure that students will be able to imitate and experience the essence of the two lives. Aside from these communities, I also received support from tokkatsu master trainers by guiding us in the outline of the project and how

it can be achieved. The support of each community to the project is beyond impressive. Now, I understand the worth of following the Japanese frame of education. More importantly, it is necessary to add you own flavor to plant the seeds of good human beings in the appropriate land.



【日本語訳】

エジプト王国のエルシーシ大統領の訪日後、日本の教育システムがいかに刺激的かについてエジプトのメディアで報道されました。そして、日本の教育スタイルは、どのようにして子どもたちの学業的・身体的な発達と、社会的かつ情緒的発達における独自のバランスをとり得たのかということが議論されました。さらに、私たちエジプトの教育システムに、この教育の特色を取り入れるようにという要請がありました。「どうやってそれは出来るのだろうか？日本の教育はエジプトに、何を特別にもたらすのだろうか？」こうした疑問はありましたが、私は政府の決定を嬉しく思っていました。私は、エジプト日本学校（EJS）として知られている、教育的な実験の一員に選ばれたことに、得意な気持ちでさえいました。いくつもの研修を受けましたが、その一つで、ある日本人専門家に、学校の中で動物を飼ってみよう言われました。それは非常識なことでしたが、生徒たちが動物を実際に観察できる場所で動物を飼うようにとアドバイスされました。どうやって？なぜ？この時、私がまさに考えていたのは、「どうしたら、私たちは、子どもの性格全体だけではな

く、親、教師、管理職をふくむ教育関係者全体のコミュニティの性格を変えることができるのだろうか」ということでした。

それから、福井大学での特活と授業研究に関する1ヶ月の研修の機会が訪れ、そこで私は、私自身の疑問の答えを見つけるための調査をしようと思いました。私たちのESJの生徒たちが、休日さえ学校に行こうとするのはなぜなのか？朝と午後の会、入学式などは、どうやって実施されているのだろうか？私は、私たちの大統領がなぜ教育改革のために日本を選んだのかを理解したいのです。少なくとも、特活のマジックのタネと、それがいかにして世界のパイオニアであるのかを見つけ出すことに焦点を当てました。

福井には、社会全体の中に、協働という隠れた綱で結びついている（基盤となっている）強力な実践コミュニティがあることに感心しました。社会全体が子どもへの共通の責任感を共有しているのです。そこでは、先生たち自身が、自らの実践コミュニティであり、親のチームは、学校全体の主要なアシスタントとしてみなされています。私は、子どもたちが失敗しても、いつでも学べるようにしておこうという情熱を感じました。これは、試行錯誤を通して学ぶ健全な現象です。福井大学のチームは、私たちの能動的な学びを組織することに尽力してくれました。それは、私たちが自国の各々の学校で特別活動を実践できるためのアクティブ・ラーニングの足場作りとなる「実践の記録化」の価値についての提案でした。私は、とても正直に、かつ正確に自分たちのやっていることを記録していた生徒たちに感動しました。教室でディスカッションと発表を行なうことは、生徒たちの自立性を促す主要な要素です。ま

た、私は、生徒たちがいかにカリキュラムと内容を実践の一部に転換することができるかについてもすばらしく思いました。

研修の後、私たちは、ハルガダEJSでここでの実践コミュニティに焦点を当てる、簡単な特活モデルを取り入れました。私の最初のミッションは、6つの学校間の実践コミュニティのためのベース・スクールを立ち上げることでした。全員をチームの一員にするという最初のアイディアは、教室でのディスカッションと教授に関する授業研究を実施することです。これを行なうために、私は、生徒の学習のために、「農家の暮らしと砂漠での暮らしのまねっこ」というテーマを用いることを考えました。このプロジェクトでは、ブレインストーミングで、教員と親のチームと、さらに別の関係者たちを巻き込みました。教員たちは、特別な役割でもってグループに入ってもらいました。学校の警備組織と労働者もまた、生徒たちが率先することと、プロジェクトへの参加に貢献しました。親たちは、とりわけ驚くべきことに、生徒たちが、これら2つの暮らしの本質を真似して経験できるようにするために、あらゆる努力を支えてくれました。これらのコミュニティの他に、私たちは、プロジェクトの範囲内で私たちを導き、どのようにしてそれが到達され得ているのかによる、特活マスタートレーナーからの支援も受けました。各コミュニティのプロジェクトのための支援は、本当に見事です。今、私には、日本の教育枠組みにならうことの価値が分かります。さらに重要なのは、良き人間の種をしかるべき土地に蒔くためには、あなたらしさを添える必要があるということです。

院生 自己紹介



小椋 幸美 おぐら ゆきみ

今年度より、ミドルリーダー養成コースで2年間学ばせていただくことになりました。よろしくお願い致します。私は、岐阜聖徳学園大学附属中学校に

勤務しており、今年で6年目になります。担当教科は数学です。担任として、一人一人とじっくり向き合って、ともに成長していける日々をととても楽しく過ごしています。また、数学の授業においては、「公式にあてはめるだけ」「教科書に書いてある」「学習塾等で習った」と生徒が捉えることから脱却することを目標としてきました。「日常生活や社会に数学が関わっている」「自分の予想と結果が違う」など多様な考えや解法ができる挑戦的課題や数学の面白さを感じられるしかけを試みてきました。例えば、中学1年生の「比例・反比例」で関数を学ぶ場面では、小学校で学習した内容をもとにしながら、中学校での学習内容を習得することを到達目標としていますが、さらに進んで生徒自ら高校の内容の「2次関数」や「漸化式」まで学習をつなげようとする姿も多くありました。さらに、中学1年生で「空間図形」を学習すると、面積や体積を求める際、辺の長さが必要になります。それは必ず有理数とは限りません。中学3年生で学習する「平方根」が出てきたり、「三平方の定理」を応用する場面も出てきます。また、立式をして解を求める場合、式変形で追うことも、グラフをかいて追うこともできるというように、さまざまなアプローチができることに数学の面白さが

あり、奥深さではないかと思います。実際、自身の授業でも、生徒たちは気づいてはいませんが、高校数学で習う考え方を導き出す場面があり、驚きで身震いした経験があります。逆に、自身が高校で学習したことを中学生がこんなにも単純に自分が今知っている（感覚的にわかる）知識と結び付けて考えられることに、学ばされることばかりでした。さらには、自身の予想をはるかに超える意見や考え方がでてきたとき、授業をしている自分自身が数学を楽しんでいることに気づき、そして、生徒と「共に考える」時間を経て、ますます数学が好きになりました。

このような経験を経て、生徒自身が必然性を感じながら、数学を追究していける場面をつくりたいと思い、数学におけるプロジェクト的学習をベースにした授業にたどり着きました。これは、自分一人だけの力で成し得るものではないことは深く感じており、教科の先生方をはじめ、他教科の先生方の協力も必要不可欠であると感じています。恵まれていることに、教科の先生方のご協力により、土曜授業の数学の時間を「プロジェクト型学習」にあてることができました。この個人の取り組みが、教科内で共有され、さらには教科を越えて、学校全体で取り組んでいけるように努力をしていきたいと思います。

そして、これからの2年間、自分の視野を広げ、自身の実践を振り返りながら、本校の教育活動につなげていきたいと思います。2年間、よろしくお願い致します。



小俣 悌彦 おまた やすひこ

はじめまして。この度、教職大学院のミドルリーダー養成コースに入学しました小俣悌彦（おまたやすひこ）と申します。様々な方々に出会い、研鑽できますことを楽しみにしております。どうぞよろしくお願い致します。出身は山梨県ですが、高校卒業後は栃木、埼玉、東京、神奈川と首都圏を転々としてきました。現勤務校は神奈川県川崎市にあるカリタス女子中学高等学校という中高一貫の女子校で、私の担当教科は英語です。教職に就くまでを振り返ってみますと、中学2年生の頃英語は大の苦手科目で過去形さえわからなかったこと、大学進学にあたっては文系で数学が生かせるからという安易な気持ちで経営学部に進学したこと、その後の大学生活で塾でアルバイトを経験したことで教職を目指したくなり翌年に教育学部を再受験したこと、教職に就く前にどうしても海外留学を経験したかったため大学卒業後10カ月カナダに留学したこと、帰国後は一度は一般企業に勤める経験がしたいと思い英会話学校に勤務したことなどがありました。列举するだけでも、あまり計画性があるとは言えず、お恥かしい限りですが、その後、神奈川県にある技能連携校で高校3年生の担任をするところから教員生活がスタートし、現勤務校での15年を含め、教員を22年間続けてきております。これまでの勤務校は4校ですが、すべて私立学校です。自分自身は小中高と公立で、大学も国立出身でしたので、私学には縁がなかったのですが、教員の手で学校を作っていけるの

ではという憧れから私学で働くことを選び、続けてきております。私学の良さを感じる一方で、異動がないため公立学校と比べて組織の活性化が課題であると感じています。カリタス女子中学高等学校はカナダのシスター方の手によって作られたカトリックの学校で来年には創立60周年を迎えます。カリタス（CARITAS ラテン語で「慈愛」）という校名が表す通り、心の教育を大切にしている、教育理念は「普遍的な愛をもって人に尽くす人間の育成（Women for others with CARITAS.）」です。朝の祈りから始まる一日で、多くの生徒は穏やかに安心して有意義な学校生活を送っています。真面目に努力する生徒が多く、着実に力をつけ、社会に出てから活躍し、教員として誇りに思っています。ただ一方で、これからの先行き不透明な世の中を生きていくのに必要とされる力をつけさせるのに、学校としてどう取り組んでいくかについては、教員一人ひとりが視野を広げ、研鑽していく必要があると感じています。

今回大学院に通うにあたり、これまで当たり前に行ってきたことを見直し、中学高等学校だけでなく、系列の幼稚園、小学校を含めた学園全体での取組にも目を向け、既に取組を始めている同僚とともに周囲の教員を巻き込みながら、より良い学園作りに着手していきたいと考えています。仕事一辺倒の22年でしたが、これからの2年はバランスを大切にしながら過ごし、これから出会う多くの方々と切磋琢磨しながら成長する有意義なものにしていきたいと思います。ご迷惑をおかけすることもあるかと思いますがどうぞよろしくお願い致します。



海東 直希 かいとう なおき

人生100年時代。老後は、誰にも迷惑をかけず、元気に過ごしたい。そのために、音楽、楽器を始めたい。哀愁漂うハーモニカ…小学

校教員ならば鍵盤ハーモニカ…はたまた王道のギター…死ぬまでにピアノも弾いてみたい…どれも経験はありませんが、自分の老後のためにも、そして子どもたちのためにも、自分が生き生きと人生を楽しみたい！これが、教員生活を送る中で、大きな目標の一つです。

はじめまして。海東直希と申します。生まれは平成元年5月。慣れ親しんだ平成との別れは何か寂しくもありますが、「令和」という新たなスタートに胸が膨らんでもいます。勤務校は神奈川県のカリタス小学校、教員生活は8年目となりました。

この7年間の教員生活で、一番心に残った言葉があります。私は自分の特性上、威厳があるタイプでなく、子どもたちからなめられる（いじられる）ような人間です。数年前、自分の性格がなかなか変えられない中、「どうしたらなめられないようになるのかなあ」と悶々と考える日々。そんなとき、学校で偶然話す機会のあったお医者さんがこうお話しされました。

「なめられないようにするのはではなく、なめられても動じない人になればいいんですよ」

なるほど～考え方次第だなあと。なかなか変えられないもので悩んでいても上手くいかないですもんね。以前に読んだ大ベストセラー『嫌われる勇氣』の中の一節「課題の分離」の考え方とどこか似ていると感嘆した出来事でした。自分にできること（変えられること）を変えていこう。発想の転換が起きてからというもの、子どもたちとの関わり一つひとつが、楽しみになっていきました。授業も同じで、どんな題材を使い、どんな発問をしたら子どもたちは盛り上がるのだろう…と、ある種「ゲームに夢中になる」ように、前向きに楽しむことができるようになっていきました。もちろん、上手くいかない日も多々あって、反省を繰り返していくのですが…。

これまで、密度の濃い日々を送ってきました。ただ、朝から晩まで学校にいて、そのまま帰宅を繰り返す毎日。異動のない生活。「井の中の蛙ではダメだ」と感じつつ、気付けば8年目。授業も魅力的なものではないし、このままでいいのだろうか…。

そんな中、出会えたのが、「福井大学 教職大学院」。私にとって、神様からのプレゼントでした。理由の一つは…「出張が夢だった」からです！笑。学校は会社に比べ、新幹線での出張が少ない場所だと思うからです。そして何より、福井大学に行くと、

「視野が広がる」と感じるからです。様々な校種の方の知見やご活躍、時には悩みをうかがいながら学ぶ時間は、これまでにない経験です。自らの実践を省察し、これからの展望に思いを馳せる時間をとることができるのも、尊い有難い時間です。

これから学びたいものとして考えているのは、〈学びの個別化・協同化・プロジェクト化〉です。熊本大学教育学部准教授である苦野一徳さんの提唱された言葉を引用させていただきました。自分なりにかみ砕いて、理解を深めていきます。長きにわたって行ってきた一斉授業は消えることはなく、私自身、今後も続けていきます。ただ、子どもたちの学びの密度を振り返ると、よりよい在り方があるのではないかと考えています。勉強があまり好きでない子にとっても、前のめりになって学ぶことを楽しむ日が続いてほしい…。そう願うばかりでなく、これから研究をしていきたいと思っています。

今年度は、昨年に引き続き、6年生の担任をしております。学年では初めて、教科担任制に取り組む一年。社会科（歴史）を担当しております。ただ教科書や資料集を広げて受け身で受ける授業からの脱却を目指し、これからも教材研究をしてまいります。お勧めの書籍や授業のやり方等ございましたら、ぜひともご教示いただけますと幸いです。

また、3クラスの社会科に加えて、クラスの「総合」も担当をしています。カリタス小学校では、「平成」の30年間、総合教育活動に取り組んできました。長野県の伊那小学校にヒントを得て、わが校でも実践しております。写真は、昨年の総合教育活動で「チキンラーメン」を作っている際の一枚。各学級テーマを一つに決めるのですが、昨年は「インスタントラーメン」に取り組んでいました。総合教育はまさに「プロジェクト化」のようなもので、子どもたち不動の人気、ナンバーワンです。対話も自然と生まれる、子どもたちの力を伸ばしてくれる科目です。

（本校から『問いつづける子が育つ 協働で学び合う授業の創造』という本が出ております！）と、宣伝もさせていただいたところで、字数になりそうです。これから、大学院に通う皆様方と話すことで、

実践を省察できる日々を、本当に楽しみにしております。2年間、どうぞ、宜しくお願い申し上げます。



竹澤 尚美 たけざわ なおみ

この4月より、連合教職大学院 教職開発専攻 ミドルリーダーコースで学ばせていただくことになりました。

いろいろな方からの学びを得たいという思いで教職大学院に通わせて頂きます。どうぞよろしくお願いいたします。

この福井の地で、ずっと幼児教育に携わってまいりました。仁愛女子短期大学附属幼稚園に10年あまり勤務したのち、幼稚園教諭と保育士との相違、子どもの現状、子どもたちへの向き合い方、一日の流れの中での子どもたちとのかかわりを実際に現場で体験したく、保育園で勤務しました。その後、我が子の子育てに試行錯誤しながら、“どっぷり”と我が子に向き合ってきました。昨年の4月より、福井市報徳幼稚園で勤務させて頂いております。

急速に情報化が進展する社会の中で、画一的な教育をしているのでは、意味がありません。教師自身が、社会の目まぐるしい変化に対応し、アンテナを張りながら、その時々の子どもの現状を捉えて教育していくことが必要不可欠であると思います。

幼児教育は、特に子どもたちと保護者とのつながりが大切な時期ですので、家庭との連携においてもかかわり方が重要になってきます。私たち教師が、日本の教育がどのような方向に向かっているのか、そこには、どのような背景があり、どのような子ど

もの育ちを望んでいるのかを学びながら家庭との連携を培い、その中でよりよい子どもたちの成長につなげていくが必要であると思います。

大学院において、日本の教育現状を学びながら、自分の思いをどのようにマッチングしていけばいいのか、自分は今、目の前の子どもたちに何ができるのか・・・ということを考えていきたいと思っています。その中に於いても、自分一人の思いで突っ走っていくのではなく、“令和”の意味するが如く、“冷静にいろいろな方々の思いを聴きながら、自分の思いも伝えながら、和合をはかり、未来を担う子どもたちが幸せな人生をおくれますように”を大切にしながら、教育に携わっていききたいと思っています。

今までの幼児教育における自分の子どもたちとの向き合い方においても、この2年間で、いろいろな方の思いを聴かせていただきながら、先生方にご指導を賜りながら、もう一度見つめなおし改めていきたいと思っています。

あまりにも目まぐるしい社会の変化に自分がどこまで向き合えるのかという不安も大きいのですが、今自分にできることを頑張っていきたいと思っています。どうぞよろしくお願い致します。

これまでの実践や研究の中で培ってきたことをいかしつつ、福井で出会う皆さんの実践に学びながら、学校や地域で、また国境を越えて、人々が豊かにつながり合い・学び合い、その人らしく生きていける社会を創っていくことを支えていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

土居 亜貴子 どい あきこ

兵庫県立御影高等学校・地歴公民科の土居亜貴子です。2000年の4月に関西学院大学社会学部を卒業

した私が、なぜ今になって連合教職大学院のミドルリーダー養成コースで学ぶのか。それは、予測困難

なこれからの時代をたくましく生き抜く力を、私自身が身に付けたいと考えたからです。教育改革の流れや子どもたちに身に付けさせたい資質・能力について学んでいくなかで、そもそも私自身の資質・能力が不足していることに気が付き、何とかしたいと思うようになりました。

大学卒業後、なかなか兵庫県教員採用試験に合格することができず、県立高校の非常勤講師や臨時講師、私立中高一貫校の常勤講師などを経験しました。30 歳になってようやく教諭として採用されてからも、勤務校の地域や校種、担当する教科や分掌も様々で、日々目の前の仕事をこなすことに精いっぱいなまま突っ走ってきました。



永田 卓裕

この度、福井大学連合教職大学院ミドルリーダー養成コースに入学しました永田卓裕と申します。生まれてからの 18 年間で越前市（旧武生市）で過ごした後、4 年間の大学生活

を広島で過ごし、福井県で英語の教員を始めて現在 9 年目になります。趣味として挙げられるものは主に 2 つ、F1 観戦と野球観戦です。前者にあまり馴染みのない方からは、「ただ同じところクルクルしているだけじゃないか」と言われます。しかし、世界最高峰の自動車メーカーやドライバーが、たった 100 分の 1 秒を縮めるために、年間数百億円とドライバーの命をかけて競い合う姿には、夢を感じずにはいられません。後者については、自分が小・中学校時代に野球をしていたこともあります、大きく影響したのは広島で過ごした 4 年間です。そう、私は鯉に恋しています。

さて、私が教職を志したきっかけは、中学時代がありました。高校生だった姉が留学することになり、その関係で 1 年間ベルギーからの留学生のホストファミリーをしました。現在となっては福井県にも多

しかし、ここ数年でようやく少し余裕ができ、校外の研究会等にも積極的に参加するようになりました。そのなかで、多様な方々と協働しながら学ぶ楽しさ、学んだことを実践する場を持っているありがたさを実感しました。特に、質問づくり（QFT）や国際バカロレア DP「知の理論」のワークショップでは大いに視野が広がりました。それと同時に、自分の力不足も痛感し、連合教職大学院への入学を検討するようになったのです。勤務校で今年度から先行実施する総合的な探究の時間をどう組み立てていくのか。次期学習指導要領を見据えて、日本史の授業でどのように主体的で深い学びを実現するのか。そういったことを、協働し、省察しながら学んでいきたいと考えています。よろしくお願いいたします。

ながた たかひろ

くの外国人が住むようになり、地域社会でも学校でも外国人と接する機会は多くなりましたが、当時はまだ外国人が珍しく、彼が黒人だったこともあり、近所や外出先での彼に対する冷たい目線や扱いは、当時中学 2 年生だった私にとっても衝撃的なものでした。言葉が通じなくても、一緒に時間を過ごせばこんなに楽しいのに、なぜ日本人はこんなに外国人を毛嫌いするのだろうか。中学校 2 年生ながら、こんな疑問を持ったことが、教員を目指すきっかけになりました。

教員としての初めての勤務校は小浜水産高校（現若狭高校海洋科学科）でした。そこでの 4 年間は非常に濃く、私の教育観の基礎を作りあげてくれたものでしたが、ここでは紙面も限られているのでまた別の機会に紹介したいと思います。現在の勤務校である羽水高校に配属され、5 年目になります。配属 2 年目から羽水高校が OECD 日本イノベーション教育ネットワーク（ISN）に参加したこと（現在羽水高校は ISN2.0 研究校）および新学習指導要領下での課題探究学習の導入を見据え、総合的な学習（探究）の時間にプロジェクト学習（PBL）を実施しています。私はその初年度から事務局に入らせていただき、日々

の PBL のカリキュラムや授業案作りなどを担当してきました。また、昨年度には香港の THE ELCHK Yuen Long Lutheran Secondary School (YLLSS) と姉妹校と提携を結び、両校の PBL を土台とした国際探究学習を始めました。今年 2 月には、YLLSS の生徒 20 名が来日し、それぞれの国の地域課題についてプレゼンやディスカッションを行いました。今後、この活動をより発展させるべく、日々その方法を模索しています。

教職大学院では、「持続可能な PBL づくり」について研究していきたいと考えています。PBL には学校内だけを見ても、生徒・授業担当者だけでなく、学年会や各校務分署、さらには PTA や同窓会など様々

な立場の人たちから協力をいただきます。さらには県や大学、市役所や地域の自治会や企業など、本当に様々な立場の人たちに支えられています。この活動をより発展させ、生徒にとってより深い学びにするためには、担当教員だけでなく、それを支える様々な立場のチーム作りが必要だと考えています。担当者や生徒、学校を取り巻く環境が変化しても、継続して学びを深めていくことができる、そんな PBL のカリキュラムやそれを支えるチームを作っていきたいと考えています。まだまだ知識や経験も浅いですが、みなさんから多くを学び、充実した 2 年間を送りたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

ミドルリーダー/マネジメントコースだより

2 年目のスタートにあたり

ミドルリーダー養成コース 2 年/福井大学教育学部附属義務教育学校・後期課程 田原 裕

教職大学院での学びも 2 年目に突入。今年はどんな自分の中での変容が生まれるのかと期待をする一方で、あと 1 年とたたないうちに長期実践報告書をまとめるのかと、いよいよもって不安な気持ちが強くなり始めている今日この頃です。

思えば 1 年前、せっかく附属にいるのだからという理由で入学したこの教職大学院。正直、現場での授業も受け持っている校務分掌それぞれにおいても、はっきりとした手応えを掴んではおらず、特段自分自身で信念を持って取り組んできた実践や立ち上げてきたプロジェクトがあったわけでもないことから、「長期実践報告を書くということなんて想像できない」という気持ちでいっぱいでした。ちょっと逃げたいかも…そんなことさえ思っていたのも覚えていきます。

そんな中始まった久々の学生生活。最初は、読んで、書いて、語って、聴いて、また書いて。それを繰り返していき長期実践報告書が書けるようになる

のかという気持ちも感じていました。長期実践報告書を書くことが目標になってしまい、「自身の実践を振り返り新たな実践の展望を掴み取り組んでいく」という本当の目的を見失っていました。毎月のカンファレンスやラウンドテーブルでは、同じテーブルになった方々と語りあい学びあう時間は有意義な時間でした。ところが、高い志を持ち実践されている皆さんの語りを聴くことや、明確な目標を持って実践されている皆さんの様子を知れば知るほど、自分のやりたいことは何なのだろうと、悩み答え探しを繰り返していた時期が続きました。

私が少しずつ長期実践報告書の展望が見え始めた（まだまだ見えてはいませんが）のは、パッチワークのような一貫性のないつぎはぎの実践を、その時その時に語ることで、これまではほとんどやってこなかった、自分自身のやってきたことの捉え直しをできたことにありました。そんな中で、自分自身が語る内容の大半は保健体育の授業であること、勤務

校が変わることで授業観が変化してきていること、勤務校が変わっても一貫して大事にしようとしていることがあること、一度は頭から離れていたことが再度大事なこととしてよみがえってきていること、そういった変化がどうして生まれているのか、そして今何に取り組もうとしているのか。授業記録を残すということを全くしてこなかったのが、過去のものほど思い起こしにくいのですが、今年 1 年はそんなことにも時間をかけてみたいと考えています。

さて、本校は 2 年前から義務教育学校として開校したのを機に、これまでのベースである協働探究カ

リキュラムに加え、9 カ年を通した各教科のカリキュラムづくりにも取り組んでいます。発意—構想—構築—遂行・表現—省察という探究サイクルを大事にした子どもたちの学習づくりでさえまならないのに、それを 9 カ年のつながりを意識したもっと大きな枠組みの中で創っていくことにも挑戦しています。頭を抱えることも多いのですが、昨年 1 年間で本当に多くの方の実践をお聴ききすることで得た新たな実践へのヒントや元気を、自身の実践へと生かしていきたいと思います。

Teaching Practice Challenges with TBLT

ミドルリーダー養成コース 2 年/福井大学教育学部附属義務教育学校・後期課程

Naing Win Soe

I believe that teaching is a profession which needs to be upgraded continuously, and the engagements with the learners in the school enrich continuing professional development. As an intern for my professional development, I keep observing the teaching sequences of the English lessons in Fuzoku. I have also joined lesson study meetings to deepen the understanding of school culture and the teachers' professional development. Through observations and participations in discussions concerning students' learning, those opened my eyes to perspective on English education and I could realize how the students learn the language and language teaching should be.

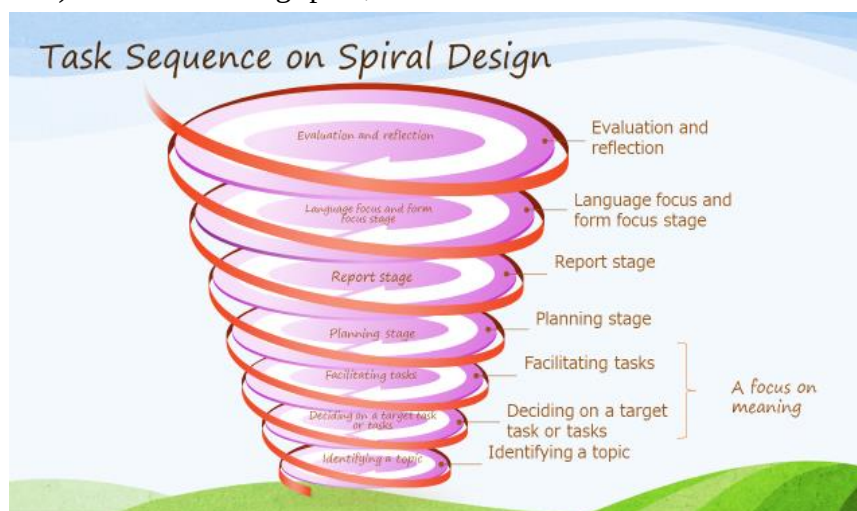
In my interpretation from the observations, the students in Fuzoku are mostly asked to practice explicitly-presented vocabulary and grammar patterns individually, as a group or the whole class. They probably have some homework for writing or supplementary exercises for repetitive practice of the intended patterns and new vocabulary. They are usually given the activity which is related to the topic in the English text and intended for speaking. The activity topic is so familiar with the students that they will pay less intention on it

but when it comes to some topics which are of their future interest of work or visit, they get probably engaged in the lesson actively. So, choosing the activity topic is crucial according to their interest. Sometimes, explicit-taught grammatical structures are given to be used in the activity but vocabulary is not restricted for extended looking up in the electronic dictionary. Virtually, explicit-presented grammar and vocabulary are embedded in the activity of direct speaking which is directly designed for speaking activity or indirect speaking: writing activity precedes the speaking activity as a homework or instant writing on the purpose of presentation by solo or pairs or to the class in front of the classmates. In this kind of practice, form focus precedes language use in the production stage which gets the students well-performed in accuracy of the writing rather than fluency in speaking. Although writing stage is a preparation step for gradual development of speaking skill, it does not seem to be natural and authentic communication with the use of pre-taught grammatical structures in the writing which will be used as a speaking activity later. So, I think the students will

perform better in accuracy more than in fluency.

To resolve this difficulty of fluency in speaking, I like to propose TBLT when I teach English to the students in Fuzoku since it can be applied back in Myanmar. With the change of oral proficiency rather than reading comprehension, the nature of language and of learning, teaching methods have been shifted from grammar translation method to audiolingual method through communicative language teaching (CLT) which underpins task-based language teaching, an alternative of traditional teaching methods like PPP (present, practice and produce). As a teaching plan,

Communicative activities are designed on the graded sequences of tasks which are spiraled on the purpose of improving fluency first and then accuracy. Many traditional teaching methodologies begin by teaching grammatical forms and then go on to set communicative activities in which they believe learners will be able to use those forms (Dave Willis & Jane Willis, 2007). In contrast, in this design, meaning-focused activities precede form-focused activities which help the language to be developed. This will be a big challenge for me since the specific linguistic features are prescribed to learn in the textbook for the examination.



For the first stage, it has been recently done with the students' votes on proposed four topics related to the topic in the textbook. It is important to identify a topic based on the students' interest, levels of their proficiency and the content familiarity. Even in the exam-oriented class of Grade Nine, the topics can be identified and selected according to the students' needs and interests. Topics can be identified and chosen from feature in the learners' English textbooks. Referring to one of the principles of OECD, the students were given choice to decide the communicative topic by themselves. This would help student to inspire their own learning. However, there will be a great challenge to design communicative tasks which includes specific grammar points in prescribed textbook. Although the topic decided by the students is related to the topic in the textbook, contents

are not much similar as the topic chosen. The idea of considering those contents in the new topic will not be possible. In addition, designing the graded sequence of tasks with the level of the students' language proficiency and motivation will be a great challenge for me.

Creative teacher, both novice and veteran, has new challenges to make the lessons interesting to his or her students even in old or new class. There will be plenty more of challenges for a teacher like me who will teach English, using it as a medium of instruction to students of different culture and language (Japanese will be used if the students don't understand the instructions). However, those challenges are presumed to be good opportunities for me as continuing professional development and evidences of

teaching practice for student-teachers back to my country as a teacher of methodology in university of education. Then, I hope

collaboration with the teachers and students, reflection in and on the actions will lead me to the success of the teaching learning process.

インターンシップ／週間カンファレンス報告

変わる環境、変わらぬ想い

授業研究・教職専門性開発コース3年/福井市明新小学校 竹内 達郎

この教職大学院に入学し、3度目の春を迎えた。この教職大学院のスタイルに慣れたような気もするが、まだまだ様々なことに対して考え悩む日々を送っている。

3年目に入り、教職大学院の学びを自分が現場に出た際にどのように結び付けていけばよいかについて考える機会が多くなった。様々な話題や内容に対し、自分ならどのように考えるか、どのように行動していくかについてM1、2の時以上に意識するようになったと感じる。そして同時にそれを他者に話し、深めていくことで様々な考えていくことができるという環境に貴重な経験ができていていると感じるようになった。

自分はこれまで附属義務教育学校の前期課程で長期インターンシップを行っていたが、今年1年間は、明新小学校でさせていただくことになった。2校の間に大きな違いはないものの、やはり学校が変わるということは大きな変化であると感じ、はじめの1週間ほどは体が慣れていないような感覚を覚えた。しかし、新たな気持ちでリスタートを切ることができたようで、新たに気づくことも多いような気がする。子供への応答の仕方、学習の支援方法についてなど、改めて考えながら活動していくことでぼんやりとしていた自分の考えが少しずつではあるが、はっきりしたものとなってきているのではとも感じる事ができている。また、インターンシップの中で特別支援学級の子への支援も行うようになった。支援級の

子とのかかわりはほとんど経験がない状態である。支援学級の先生と細かく話す時間を取りながらどのように関わり支援をしていけばよいかについても学びを深めていきたい。

また、教職大学院のストレートマスター(以下「SM」と表記)の院生として新たに7名が入学した。同期の院生が卒業していき、SMのコミュニティも一新された雰囲気である。その中で自分は一応院生歴が長いM3となったわけであるが、その分様々な立場として活動していくことができるのではないかと考えている。SMの院生が集まって行う週1回のカンファレンスでは、院生が中心になって企画する活動がメインで行われている。その企画の中心はM2であるものの、人数の都合上M3も企画者として会議に参加している。これまでのM3の院生は比較的見守る立場であることが多かったが、企画にしっかり入ることで考え方をさらに変化させていくきっかけになったり、より集団としての結束が強まってきたりしている気がする。企画の大部分はこれまでと変わらないものの、進め方などに変化があるため、新たな考えのもとで企画を行わなければならない。

その中で重要になってくるものが、自分のこれまでの考えや思いである。すべてが当てはまることは少ないものの、考えていく足場としての経験知や思考というものがあり、少しでもグループ内での学びが生まれるように考えていくことがM3としての自分が行えることの一つになるのではないかなと思う。こ

れまで培ってきた思いを適材適所で生かしつつ活動を進めていきたい。

また、自分たちが考えた企画の受け手である M1 の思いも同様に加味していかなければいけないとも感じている。自分たちで作り上げていく活動を急に行っている M1の中には、悩みや困り感が生まれてきてしまうのは必然である。実際、M1 の意見を聞くと、「自分の考えが正しいのか自信が持てない時がある」「活動の見通しが持てずにどう動いていけばよいかははっきりとしていない」といった思いや意見も聞かれている。それを少しでも支えていくことができ

るようにしていくことも必要である。M1 とのコミュニケーションを行う機会を増やし、M1 の思いや考えも踏まえながら企画者としてだけでなく、企画を進めていくプレイヤーとしても共に学びを深めていきたいと考えている。

M3 になり、環境がさまざまに変化していく一方で、M1、2 の経験とともにある程度自分の中の思いの中でも変わらない部分もあると感じている。この大学院の最後の 1 年を来年度へ向けた確かな学びにしていくなためにも、様々な場面や立場で常に考え続けていきたい。

木曜カンファレンス

授業研究・教職専門性開発コース 3 年/福井市明新小学校 日野 晶

東京から福井に来て 3 度目にして最後の春が来た。福井の土地にも次第に慣れ、方言も心地よく感じる。福井大学の教職大学院も今年で 3 年目になる。すっかりこの大学院で使われる「見取り」や「探究」、「サイクル」と言った言葉が自分に浸透してきたとも感じる。3 年目に入って改めて、大学院の授業の一環である“木曜カンファレンス”を考える。“木曜カンファレンス”とは、毎週木曜日に同じ教職専門性開発コースのみんなが集まり、これまでのインターン先での学びの振り返りや、協働探究の授業デザインを考えるといったことをテーマに様々に話し合い、自分自身の理論が構築される場でもある。最近私は 3 年目にして改めて木曜カンファレンスの存在を考えるようになった。今まで 2 年目までは A 校にインターンとして行かせていただき、院生も私を含めて 6 人いた。A 校での 2 年間は私にとって多くの先生方の名授業を多く見ることができ、探究の意義を知り、尚且つ、授業研究について常に考え、教員として研究する姿勢を培うことができた。授業実践をするとなると、それに向けて 1 ヶ月程かけて教材研究をした。教材研究は教科書や学習指導要領だけでなく、その教材について放課後に同じインターン先の院生と「これは何をねらっているのだろう。」「こ

のワークシートだとあの子達はどのように考えるのだろうか。」と様々に吟味した。このように院生同士で吟味できたのも、院生がお互い相手のクラスの状態を知っていたことや、みんなで授業を作り上げることに抵抗がなく、むしろ自然と何かしらクラスのことや授業のことを話し合うことが毎日当たり前であったからであると考えている。そんな風と同じインターン先で話し合える場がとても良かった。それも、毎週木曜カンファレンスでのインターンの振り返りや、協働探究の授業デザインを話し合うなどを常に行ってきたからこそついた“癖”のようなものだったのだと思う。そして、今年度に入り、B 校にインターンで行かせていただいているが、B 校では初めてに感じることも多く、同じインターン先の院生も 4 人となり、また新たな環境として過ごしている。新たな環境として感じる反面、A 校とも共通した部分を実感し、“学校として大事なこと”を見いだせている気もしている。2 年目までと同じように、放課後になると同じインターン日に来ている同期の竹内院生、M1 の吉田院生とその日の出来事について話すことも日常となっている。「こういう時どうすればいいのか。」という発案に一緒になって、「うーん」と考える時もあれば、共通で入っている「特別支援

学級」について子どもの様子から考えたり、「この先生はここを大切にしているこういうところに返ってきているところがすごい。」と自分たちが見た先生方の良さを共有する時もある。これもまた、木曜カンファレンスで培った“話し合う、共有する癖”が活かされているのだと感じる。インターン先の先生方と話すことはもちろん大切だが、こうやって院生同士で話すことも大切にしたいと日々思っている。しかし、木曜カンファレンスの良さはこうした癖がつくことだけではない。毎年入ってくる教職専門性開発コースの院生は、学年内でもインターン先が複数に振り分けられている。これもきっと大学院の意図で、それぞれの学校での学びを共有できる場として木曜カンファレンスを設けているのだと思ったが、3年目にしてまさにその思惑にハマった私がいた。正直、2年目までは、インターン先が違う院生と話をしても、きつとどこか他人事に思ってしまう自分がいたのだと思う。それも、「そっちの学校はそんな風なのね。」と知ったところで、なるほどと思ってしまうだけだったのだと思う。しかしついこの間、木曜カンファレンスの“協働探究における学びのサ

イクルをデザインする”という企画について担当のM2・M3と話をしている中で、A校に行っている院生の話を聞いて「探究」という言葉を久々に実感し、A校での実践や先生方の授業やカリキュラムデザインをしている様子を思い出した。それまで無意識にB校はB校として割り切っていた自分がいたが、A校の話を聞き、C校に行っている院生の話を聞くことで、A校で行っていることは決して特別でA校だからできるのではなく、B校やC校の環境でもできることではないのか、と照らし合わせて考えることができた。この時の話し合いを経て、インターン先が違って、共感し合ったり、新たな視点を知ったり、気づいたりすることができ、それもまた私にとって学びのつながりを生み出すものとなるのだと改めて実感した。木曜カンファレンスの存在は“話し合う、共有する癖”がつくだけでなく、学校が異なるメンバーが話し合うことで共通することや違いから教育のあり方を自分の中で整理することのできる環境なのだと思う。残り1年、この木曜カンファレンスという院生の場を自分の学びを再認識できる場として大事にしていきたいと思う。

変わることで学ぶ

授業研究・教職専門性開発コース3年/福井市中藤小学校 森本 希

昨年とはうってかわって、冬は雪が積もらず今年はどうな四季の移ろいを感じる1年になるのか楽しみと不安を併せ持つように、私の大学院での3年目の学びが始まりました。

小学校免許取得プログラムを履修しているため大学院の中では最上級生である3年目になり、インターンシップや木曜カンファレンスをどのように取り組んでいこうかと昨年までとは違う悩み方をしているなど感じています。頼りにしていた仲間や先輩が抜け、3年目としてどうすればいいのかと考えることもあります。1人で考えることもありますが、困ったときに相談し合える3年目の同期が多くいる心強さを感じながら院生生活を送っているように思います。

木曜カンファレンスでは、大きく2つの変化がありました。1つ目は、昨年までの3年目の院生は、2年目の院生が木曜カンファレンスを運営していくにあたって、2年間の経験を伝えながら2年目の運営を支えるという立場であったが、今年は2年目の院生と共に運営を担当することになりました。運営に関わるだけではなく、今までの3年目の院生は、支えるという立場をそれぞれ個人で考えられていたが、今年は3年目が6人いることもあり、3年目でも方向性を話し合いながら共有したうえで進んでいく形となっているなど感じています。2つ目の変化は、院生に必要なことをもとにテーマを設定し、考え話し合い、学び合う時間である主担企画がなくなり、また

新しい学び方をしていく方向になりました。現状にとどまらず新しい学びに向かって挑戦していくメンバーとこれからを考える時間は、刺激的でもあり今まで経験したことのない学びの始まりでもあるので楽しみでもあります。新しい学びになり主担企画がなくなることで私の中では、この思いと共に今までの主担企画で得た学びが改めて感じられました。私たちは各学校でインターンという形で教育現場について学ばせてもらっていますが、現場で子供たちと関わることを通して、自分の考え方を捉え直し続けていると思っています。主担企画で話すテーマについて、経験がない1年目では、話す内容に限界があるのではないかと考えていたこともありました。それはただの理想なのではないかと感じていました。答えがこの時間にみつからないのに、なぜ理想を語り続ける時間があるのかさえもわからなかったときもあります。しかし、この時間は私のこれから現場に出る土台作りでもあったなと思っています。私はこの時間がなければ1人でしか考えることしかでき

ずに、新しい自分の可能性や人と考え方を共有した後に発見する考え方の楽しさも得ることができなかったことを改めて気づかされています。今までの自分の考え方の原点にあるのは、今まで経験してきたことや子供たちとインターンで関わっているからこそできたものでもあり、理想であってもこの時間がなければ考えることがないまま過ぎ去っていったかもしれないということに気づかされました。主担企画が変わったことによって、語るだけではなく聴き、話をつなげ、広げていく力をどう培っていくのかが、これからの自分の課題でもあるので、自分の成長につなげていくためにも、自分の意識も変えなければいけない、また新しい1年だと思っています。個人では、昨年までを振り返り、自分の成長と課題を見つめ直す時間を持ちつつ、木曜カンファレンスでの目標を作り直していく一方で、全体では昨年を生かしながらも、みんなで充実した木曜カンファレンスにしていければいいなと思います。

月間カンファレンス報告

授業研究・教職専門性開発コース2年／福井大学教育学部附属義務教育学校・後期課程

澤崎 俊之

平成がもうすぐ終わる4月下旬に今年度初の月間カンファレンスに参加させていただいた。

昨年度の私は、この4月の月間カンファレンスの「実践的な自己紹介」や「教育改革の展開を吟味し、学校での実践を捉え直す」、「長期実践研究報告を読む/専門職としての実践と学びのプロセスを探る」、「教育改革の方向性、専門職としての実践と学びの跡づけを踏まえ今後の実践と学びの方向性と課題を探る」という4つのサイクルがそれぞれ持つ意味を表面的にしか理解できずにいた。しかし、今年度はこの4つのサイクルが持つ意味をそれぞれ自分なりに掘り下げ、理解し、それぞれのサイクルに望むこ

とができた。特に、「教育改革の展開を吟味し、学校での実践を捉え直す」では、私自身、教職大学院やインターンシップ先での学びの中で学んできた「資質・能力」について『資質・能力を育成する教育課程の在り方に関する研究報告書1』を読むことで今一度「資質・能力」とは何か自分の中で捉え直すことができた。資料において「資質・能力」とは「対象が変わっても機能することが望ましい心の動き」と書かれており、一見すると「資質・能力」は方法知にも見える。しかし、「資質・能力」は自分の中にあるものを引き出し、使っていくため、学びの中で使う度に成長していき、あらゆることに対応して

いくものとしての側面を持っていることが見えてきた。

そこで、「資質・能力」を成長させていくために鍵となることは一体何であろうかと考えていくと、本資料を読み進めていく中で「問い」の存在に気づく。「問い」といっても様々な形はあるが、「資質・能力」を成長させていくためには、「答えがある問い」より「答えがない問い」が重要となってくるだろう。これからの子供たちは予測不可能で複雑に変化し続ける社会の中で生きていき、今現在も解決されていない課題（＝答えがない問い）と直面し続けなければならないと考えていくと、「資質・能力」が必要となり、「資質・能力」の育成のために学びの中で子供たちが「答えがない問い」と向き合っていく場を設ける必要となる。その場こそが、自分がこれまで学んできた協働探究の授業であり、その授業に存在する「主題＝問い」に繋がってくるが見えてきた。改めて、自分がこれまで学んできた協働探究の授業はただ自分が理想とする「授業の在り方」を追求しているだけでなく、教育で求められていることに繋がってくると再確認できた。

その他のサイクルでも日頃の自分の学びと繋がる部分が随所にあり、同じ学びのサイクルでも1年目と2年目で見えてくるものや考えられることの違いに驚かされるだけでなく、この2日間の月間カンファレンスを終えて、何とも言えない爽快感を得ることができた。自分自身、これからも協働探究の学びの場である教職大学院で自分の学びをさらに深めていきたい。

最後になりますが、今回の月間カンファレンスで自分の拙い話に耳を傾け、様々なご助言をくださった先生方、本当にありがとうございました。自分のようなストレートの院生にとっては、豊富な経験をお持ちの現職の先生方と直接お話しさせていただく中で、自分の取り組みに共感していただくことや自分にはない視点がいただけることは非常にありがたいです。また、ご一緒させていただく機会がありましたら、よろしくお願いします。本当にありがとうございました。

“学び方を学ぶ” ～4月の月間カンファレンスに参加して～

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井市中藤小学校 家高 里佳

教職大学院生として2度目の春がやって来た。新年度が始まり、新しい仲間との出会いも果たし自身を取り巻く様々な環境の変化を感じつつも気付けば1ヵ月が経とうとしている。今回、4月の月間カンファレンスに臨む事前準備として、自分自身のこれまでの実践をふり返る機会を頂いた。2年間という限られた時間の中で、自分自身が何を得られるかを常に考えながら取り組んできたつもりではあったが、残り1年と言われるとまだまだ不十分な点ばかりが目についてしまう。それでも、ひとつひとつの課題と丁寧に向き合い、生涯学び続ける身として“学び方を学ぶ”ということをキーワードに今年度も取り組んでいきたい。

カンファレンスは、2日間にわたり以下のような4つのサイクルで構成されていた。1年目の頃は独立したもののよう感じられていたこの4つのサイクルが2年目の今回、やっと自分の中の一つの核のようなものと結びついた連関のあるサイクルとすることが出来たような実感を抱いている。

私は昨年度はじめ、様々な特性を持つ子どもに対して通常学級の中でどのような支援や配慮ができるのかという点について考えたいと考えていた。しかし、通常学級では30数名すべての子どもたちと係わる必要があることから、もっと学級全体を見ていかなければならないという意識を抱いた。授業実践をさせていただいていく中で、様々な特性をもつ子どもたちそれぞれが自分の学びを確かな実感として抱

ける授業をしたいという思いがきっかけとなり、昨年度末から“ふり返り学習”に挑戦し始めた。

これまで私は、子どもたちが自分たちの“学びのプロセス”を内省的にふり返ることで学びの実感を抱き、学びに向かう姿勢や意欲を育てたいと考えていた。もちろんそれは私が思い描く理想であり、実際の授業では子どもたちが思考しにくい状況やふり返りを書けない・言語化できない等上手くいかないことばかりであった。今回 Cycle2 において、国立教育政策研究所『資質・能力を育成する教育課程の在り方に関する研究報告書 1～使って育てて 21 世紀を生き抜くための資質・能力～』を検討した。そこではこれからの教育について、資質・能力と教科等の内容が一体化する「文脈的アプローチ」を目指していくべきであることが述べられていた。自身が取り組もうとしている“ふり返り学習”は、ここで述べられている資質・能力の中でも認知スキルの部分に大きく関わっている。今回本資料を検討していく中で、自分自身の実践が上手くいかなかったことの一因として、子どもたちにとって学習内容を学習する必要性を感じられるような文脈になっていたか？「本質的な問い」の設定が出来ていたか？という点が浮かび上がった。それによって、理由や根拠まで問題を深く追求して納得する経験までアプローチできず、子どもたちが思考する状況を生み出すことが難しかったのかもしれないと考えた。子どもたちが“学び方を学ぶ”ことも“ふり返り学習”で身につけさせたいことであると感じた。このように“ふり

返り学習”について考えていくことは、授業そのものについて考えていくことにつながっていった。

子どもたちが“学びのプロセス”を実感できる授業を、子どもたちの文脈で発展していく授業だと捉えると、授業者にはどのようなスキルや手立てが必要なのだろうか。Cycle3 での SM 福岡友輝さんの長期実践研究報告書の検討を経て、私は現段階でそれを“精選された発問”と子どもの核となる発言を見定め“発言をつなげていく（ファシリテーションする）力”ではないかと考えた。また、福岡さんが紹介されていた小杉真一郎先生の言葉「これからの教師に求められる授業は“協働の楽しさ”を伝えることが出来るか、そして“学術的な面白さ”を伝えることが出来るかどうか。どちらも求められる。」がとても印象に残っている。盛り上がりやゲーム性だけが面白い“fun”にとどまる授業ではなく、誰かに伝えたいと感じたり思考が伴う学術的な面白さを感じたりするような“interesting”な授業が求められているのだと感じた。それだけでなく、習慣を突き動かすような、信念体験にまで入り込むような授業、「すっごく頭使ったけど、今までで一番分かった！」と子どもが感じられるような授業を目指したいという考えに至った。

この 2 日間で自身の実践について省察し、次の実践に活きる思考が生まれていったように思う。2 年目の院生生活も、日々思考を再構築しながら悔いのないように取り組んでいきたい。

4 月月間カンファレンスに参加して

学校改革マネジメントコース2年／美浜町立美浜中学校 織田 恭直

4 月 20 日（土）と 21 日（日）の 2 日間、4 月月間カンファレンスが実施された。

1 日目、会場に向かいながら時が過ぎる速さを実感するとともに、1 年前の引き締まった気持ちを思い出していた。そして、2 年目というよりは新たな 1 年が始まるという気持ちでスタートしなければと考えていた。6 階でエレベーターを降りて会場に向かう廊下

では、この日の活動を考えながら今までと同様の緊張感を感じていた。会場へ入るとどのようなグループ編成になっているのかを確認し、少しわくわくするような気持ちで席に着いた。

いつもと違う環境の枠組みに身を置くことは、自分自身の中でいつもはそれほど意識していないチャンネルを開けることとなる。自分自身の実践を振り

返り、それを言語化しようと、そしてそれを他者にどのように伝えようかと思いを巡らしている自分を強く認識することになる。そのたびに、自分と向き合って今まで取り組んできた実践を言語化する作業の難しさと大切さを感じるようになる。

私自身にとっての今回のカンファレンスの山場は、「Cycle2」の「教育改革の展開を吟味し、学校での実践を捉え直す」活動であった。資料を読んで、感想などを語り合う内容であったが自分自身の認識を捉えなおす大切な機会となった。

新学習指導要領では「コンピテンシー（資質・能力）」が教育の目標となった。今までは「コンテンツ（内容）」であり、それは教えることもテストで評価することもできる。教えられないものが目標となったのが新学習指導要領であり、先進諸国の多くが学力として定義している世界標準といえるものである。資料を読み進めるなかで、「『生きる力』の育成」や「関心・意欲・態度の評価」について考えてきたこと、10年上前から課題として考えていた「道徳の評価」のことなどに関連付けていくと、文言としては特段の目新しさを感じることはなかった。「今までもやってきていること」というのが率直な感想であった。

しかし感想を語り合う中で、それは教育改革の展開という文脈の中で「コンテンツ」と「コンピテン

シー」を捉えていたのではなく、切り取られた単語としてとらえていたことを認識することとなった。毎回、こうした気づきがあることがカンファレンスのよさである。自分の実践で凝り固まっていたものが、柔らかくなることを感じる瞬間である。しかし、その凝り固まりは年季があるだけに頑固であり、その一時ですべてがすっきりしたわけではなく、もやもやした気持ちも残った。

2日目の会場へ向かう車中で懸命に考えを整理している自分がいた。もやもやした気持ちを言語化して質問するためである。このもやもやを言語化する作業も大変労力が必要であるが、もやもやに枠組みを与える作業が次に進むために大切であることも、昨年度1年間で学んできている。2日目のスタートは、この気持ちを質問することから始まった。大学院の先生方はこうした思いにも正面から向き合ってください。時間をとって、丁寧に私の思考を確認しながら話してくださった。本当にありがたいことである。

連合教職大学院での学びは、現場とつながっていることを強く実感する。今回の気づきから得た学びは、今年度勤務校で推進する授業研究につながるものである。2年目のスタートは、私にとって背筋がピンと伸びるものであった。今年度の新たな出会いとともに、忘れずに大切にしていきたい気持ちである。

4月月間カンファレンスに参加して

学校改革マネジメントコース2年／敦賀市立松陵中学校 橋本光一

爽やかな風の吹く中、4月の月間カンファレンスが行われ、私の教職大学院2年目が始まった。

昨年度は教職大学院入学と同時に教頭となり、松陵中学校から赤崎小学校に転任した。赤崎小学校は、令和3年春に敦賀北小学校、咸新小学校、角鹿中学校と統合し、小中一貫校「角鹿小中学校」として新たなスタートを切る予定である。そのため、昨年度は校区内の3小学校間の取組、小中接続に関した取組について、各校の教員と連携をとりながら小中一

貫校への移行をスムーズに行えるように準備を進めてきた。また、赤崎小は全校児童11名で、2つの複式学級を持つ極小規模校である。体験活動や多くの意見に触れる機会を増やすための「全校学び活動」と、小規模校の特徴を生かした「きめ細かな丁寧な教育」についての研究も進めてきた。昨年度は、「小中一貫校に関する取組」と「赤崎小学校独自の取組」の2つを軸にして、取組が円滑に行えるマネジメントについて研究してきた。

ところが、教職員大学 2 年目となった今年度、私自身に大きな変化があった。赤崎小学校から再び松陵中学校に異動になったのである。大きく環境が変わるため、まずは同じように 1 年目と 2 年目とで役職、校種等が変わった実践報告を探し、読ませていただいた。やはり、同じような境遇の方も居られ、その中に自分と大変似通った経歴を持っておられる方の実践報告があった。その著者のように高校勤務、行政勤務の経験はないが、小中での担任経験、日本中体連や県中体連で役員経験、教育困難校での勤務等、身近に感じることばかりであった。クロスセッションでも同じような経歴を持たれた教頭先生、状況を理解している指導教員や校下の先生と話をすることができた。そのような活動の中で、当たり前ではあるが、現在の学校の状況に応じたマネジメントが必要であることを確認できた。

さて、松陵中学校の現状であるが、松陵中を出たときの職員も半分以上が残っており、職員とは気心の知れた環境である。反面、大きく変わったと感じ

ることが、「不登校生との増加」と「支援を必要とする生徒の増加」である。この 2 点については、早急に対応していかなければならないと感じている。さらに、このような事態に対応するため、「職員の負担の増加」も起こっている。このようなことをどのようにして改善していくかが、今年度の取組になっていく。具体的なこととしては、次の様なことが挙げられる。

○不登校生徒を増加させないための、保護者、関係機関、小学校との連携のあり方

○支援を要する生徒への、専門家・専門機関との連携のあり方

○生徒と向き合う時間を確保する学校マネジメントのあり方

環境が変わり、今年度の取組について漠然としていた中、4 月月間カンファレンスでは、取組の見通しを持つことができ、私にとって非常に有意義なものであった。

2 年目の取り組みへ向けて

学校改革マネジメントコース2年／嶺南教育事務所研修課 田結 清高

4 月 6 日、新年度が始まって最初の土曜日である。福井市内は桜が満開で、足羽川の堤防や県庁の周辺など、至る所、花見に訪れた人の波でごった返していた。福井大学構内も、サークルの勧誘であるとか、健康診断を待つ新生生の長蛇の列によって、入学式の午後という初々しい気分が感じられた。そのような喧噪を横目に、私は教職大学院の開講式に参加した。昨年度感じたような、これから一体何が始まるのかという不透明感はない。2 回目であることによる少しの慣れと新しい仲間と再会する学びへの期待、そしてとうとう長期実践研究報告書を書き上げなければならない 2 年目に突入するのだという切迫感を感じていた。

教職大学院に入学して 1 年間。何をやるにもとにかく夢中で、あっという間に過ぎてしまったように思う。自分の中で研究テーマが二転三転してしまい、「あなたの研究テーマは何でしたか？」と問われる度、ばつが悪い思いをしている状況であった。そのような中、2 月のラウンドテーブルにおいてポスターセッションとグループ協議で話題提供をすることになり、これが大きな転機となった。自身が発信する立場に置かれてみて、ようやく自分の実践を整理し直し、意味付けることができてきたように思う。そして、僅かながら手応えのような感触も得ることができた。

今年度、嶺南教育事務所研修課の課員は、課長を含め 9 人中 4 人が入れ替わり、3 年目の自分が一番長

い籍年数となった。これまでは、自分よりも長く在籍する課員がいて、以前の流れを踏まえつつ的確な助言を得られてきたが、今度は逆の立場になる。これまで培われてきたものを引き継いでいくことと新しい風を取り入れることをどのように融合させていくのか。これまで任せきりで、あまり意識してこなかった課内や他課との調整をどのように進めていくのか。新しい課題が続々と自分の前に立ち現れ、身の引き締まる思いがしている。

そのような状況ではあるが、変わらない部分もある。昨年度に引き続いてコーディネーター役を務めることになった「協働研究会」や「嶺南教育実践フォーラム」である。これまで積み重ねられてきたものを基に、明らかになってきた課題に対し、所員の意見を取り入れながら、ていねいに、着実に取り組んでいこうと考えている。失敗もあるだろうが、失敗から学ぶという気持ちで、積極的に向き合えるよう心懸けていきたい。

4月20、21日、2日に渡って実施された月間カンファレンスに参加した。満開の桜はすでに散り、葉桜の季節となっていた。目の回るような4月のスケジュールに忙殺されていた自分にとって、体力的には厳しかったものの、落ち着いて自身の取り組みを見つめ直す貴重な機会となった。

1日目のグループ協議では、「協働研究会」や「嶺南教育実践フォーラム」について、「運営していく

上での1つ1つの判断について、『どうしてそうしたのか』という意味付けを書いていくとよい。それは多重な意味や狙いをもっているはずで、実践の中でこそ語れるものである。」という視点を与えていただいた。また、「事務所を担当される先生に話を聞いていただけて、ちょうどありがたかった。」という話をしたら、「担当者が意図的にそうしたのはないか。」と、自分が腐心している意図を伴ったグルーピングの価値などにも共感していただけて、大変嬉しい気持ちになった。

2日目のグループ協議では、「メンバーの入れ替わりにより歴史や積み重ねが受け継がれず、続けられてきたことの意味を理解しない者が、簡単に壊してしまうことがある。」、「新任者はゼロスタートだったとしても、それは前任者の築いたものを土台にしたゼロスタートであり、その少しずつの積み上げが重なって発展がある。」など参加者それぞれの経験に基づいた指摘を得ることができ、自身の実践を書き記すことの意義を与えていただいたように思う。嶺南教育事務所における取り組みも、「バランスを取りながらうまくやっている。」との評価をいただき、大変自信になった。2年目の取り組みに向けて指針や元気をたくさんいただき、有意義な2日間となった。

実践し省察するコミュニティ

実践研究 福井ラウンドテーブル 2019 summer sessions

福井大学総合研究棟 V (教育系 1 号館) / AOSSA

6/21 (Fri) 17:30-18:40 プレセッション 専門職学習コミュニティを培う

福井大学総合研究棟 V (教育系 1 号館) 6 階コラボレーションホール

6/22 (sat) 13:00-17:40 学校・教育・地域を考える 4 つのアプローチ

福井大学総合研究棟 V (教育系 1 号館) / AOSSA

orientation 13:00-13:10

session I 13:10-14:10 実践に学び合う広場 実践の広がりに出会う **knowledge fair**

session II 14:20-15:50 課題の提起 方向性を探る **symposiums**

session III 16:00-17:40 テーマ別の話し合い 問いを深める **forums**

学校・教育・地域を考える 4 つのアプローチ

Zone A 学校

21 世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う
ー協働を編み込み、実践をデザインし、文化を生み出すー

福井大学総合研究棟 V (教育系 1 号館)

これまで Zone A では、「子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ」というテーマのもと、学校が持続発展していくための教師協働の在り方について議論を積み重ねてきました。今回の実践研究福井ラウンドテーブル 2019 Summer Sessions では、「専門職の学び合うコミュニティ (Professional Learning Communities)」のビジョンにもとづき、「21 世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う」という新しくもあり核心的なテーマに基づき、学校が 21 世紀型の学びとして注目されている協働探究型のプロジェクト学習を子どもたちと共に推進しながら、いかにして教師同士、そして教師と子どもたちの学び合う文化を創造することができるのか、この道しるべを参加者のみなさまと協働探究していきます。

orientation 13:00-13:10

session I 13:10-14:10 **knowledge fair** (ポスターセッション)

福井県内外の幼・小・中・高・特別支援学校

session II 14:20-15:50 **symposiums** 21 世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う

シンポジスト 福井大学附属義務教育学校前期課程・教諭 五十嵐 洋行 氏
福井県立若狭高校・教諭 小坂 康之 氏
ディスカサント 大谷大学・教授/福井大学連合教職大学院・客員教授 荒瀬 克己 氏

session III 16:00-17:40 forums 協働を編み込み、実践をデザインし、文化を生み出す

Session II の議論に基づき、参加者それぞれの学校づくりの長い実践を共有し、新たな出会いと協働を編み込んでいきます。

Zone B 教師教育

21 世紀の教師教育をイノベーションする ー実践的教育力を支える教師教育改革ー

福井大学総合研究棟 V (教育系 1 号館)

Zone B では、生涯にわたる教師の職能成長を支える教師教育という視点から、「21 世紀の教師教育をイノベーションする」をテーマとしています。

このテーマの下で、昨年度までは Zone B を Zone B1 と Zone B2 とに分け、Zone B1 では、中教審答申 (H27) や国立教員養成大学・学部・大学院・附属学校の改革に関する有識者会議報告 (H29) などを踏まえ、自治体と教職大学院とが連携した体系的な教員養成や研修のあり方などについて探ってきました。また、Zone B2 では、学部や大学院で教員養成に携わる教員、学部生や大学院生のほか、現職の先生方も交え、互いの取組を語り合い聴き合うことなどを通して、学部・大学院を通じたこれからの教員養成について探ってきました。

そうした中で、昨年 (H30) には、中教審答申「2040 年に向けた高等教育のグランドデザイン」がまとめられました。大学は、多様で柔軟な教育研究体制を構築し、学びの質を保証していくことなど通じて、学修者本位の教育へと転換していくことが求められています。教職大学院もまた、現職教員のいっそう積極的な受け入れ、実務家を含む多様な教員の登用とそうした教員による教育研究活動の強化、学びの質を保証するカリキュラム・マネジメントの確立、大学の「強み」や「特色」の明確化と強化、地域への貢献などを進めていくことが求められることでしょう。

そこで今回は、Zone B1 と Zone B2 とを統合し、大学、小・中・高等学校、行政等の多様な参加者を得て、こうした高等教育のあり方を長期的に展望しつつ、改めて教師の実践的教育力を育て支えていく教師教育のあり方を探ることとしました。とりわけ、教師を志す学生 (大学院生、学部生) の実践的教育力を育成するため、長期インターンシップを含めた実習のあり方やその充実に向けた方策について、また、そうした実践的教育力育成の核となる実務家教員を含む教職大学院教員に求められる資質・能力とその育成方策とを手掛かりとして考えていきます。

子どもたちが「主体的、対話的で深い学び」を進めていくためには、教師も、さらには教師教育を担う教職大学院教員も、学ぶことを愉しみ学び続ける人でなければなりません。それぞれの取組や思い、あるいは課題や悩みなども含めて共有し、学び合いながら、これからの教師教育の進むべき方向と具体的な方策とを探っていきたいと思います。多くの皆様のご参加をお待ちしています。

orientation 13:00-13:10

session I 13:10-14:10 knowledge fair (ポスターセッション)

session II 14:20-15:50 symposiums 調整中

session III 16:00-17:40 forums 調整中

Zone C コミュニティ

持続可能なコミュニティをコーディネートする - 地域・学校のつながりを編み直す -

AOSSA

これまで Zone C では、「持続可能なコミュニティをコーディネートする」という大きなテーマのもと、そうした展開を支える広報や記録、コミュニティを支える実践者の力量形成といったサブテーマで多角的に検討してきました。今回は、地域のコミュニティにおける学校にも焦点を当て、「地域とともにある学校」についても考えていきたいと思っております。少子化や情報化といった社会の変化のなかで、これまでの地域コミュニティの在り方にも変容が生じており、改めて今「社会に開かれた教育課程」や「学校と地域の連携」といったことが教育改革でも重要課題になっています。豊かな地域コミュニティを醸成するために、地域や学校における実践者の方がどのようにそのつながりを編み直しているのか、それぞれの立場からの実践報告を共有するなかで一緒に考えていきたいと思っています。

orientation 13:00-13:10

session I 13:10-14:10 **knowledge fair** (ポスターセッション)

session II 14:20-15:50 **symposiums** 調整中

session III 16:00-17:40 **forums** 調整中

Zone D 授業研究

子どもと教師の学びを支えるために授業研究・保育研究をいかに組織するか

福井大学総合研究棟 V (教育系 1 号館)

子どもたちが真に探究していく学習を実現するには、公開授業・公開保育をやっておしまいという 1 サイクルの授業研究・保育研究に留まらず、持続的に協働で探究していく授業研究・保育研究の文化が必要といえます。Zone D ではこれまでそうした授業研究・保育研究をいかに組織するかを考えてきました。木村優・岸野麻衣編著「ワードマップ 授業研究：実践を変え、理論を刷新する」(新曜社、2019 年)においては、このような授業研究の在り方を 4 つのモードとして提起しています。モード 1 では、チェックリストに基づいて授業者の技術や知識を評定し、授業研究会で参観者が批評や助言を行うことが主となります。モード 2 は、授業実施前の段階を特に重視して指導案の検討を繰り返し、研究授業の計画を厳密に実施し検証していきます。モード 3 では、子どもの学びの見取りと同僚間のダイアログを核にすえ、実践中と実践後における授業者を含めた参加者全員の省察を重視します。モード 4 では、モード 3 に時間軸を組み込み、子どもの長い探究のプロセスを教師が協働探究し続けていきます。特にモード 4 では、1 時間の授業を見合い語り合うことに留まらず、その後の子どもたちの探究の展望を協働で検討し、単元全体を再構成していきながら、授業を終えた後には実践記録を綴り、子どもたちの学習過程とそれを支える授業デザインを捉え直していきます。

orientation 13:00-13:10

session I 13:10-14:10 **knowledge fair** (ポスターセッション)

福井県内外の幼・小・中・高・特別支援学校

session II 14:20-15:50 **symposiums** 授業・保育研究のモード(様式)をくりあげる

シンポジスト・コーディネーター (調整中)

sessionⅢ 16:00-17:40 forums 多様な授業研究・保育研究から学び合う

- A 保幼小の実践に学び合う
- B 中高の実践に学び合う
- C 特別支援教育の実践に学び合う

6/23(sun) 8:20-14:00 sessionⅣ Round Table Cross Sessions

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

①はじめに 8:30-8:40 ②自己紹介 8:40-9:00 ③報告Ⅰ 9:00-10:40 ④報告Ⅱ 10:40-11:40 ⑤報告Ⅲ 12:20-14:00

地域や職場で自分たちの実践をじっくり跡づけ、その省察をふまえて実践を編み直していく。地域・職場を大人同士が実践を通して学び合う協働体（コミュニティ）に変えていく。その中で一人一人が、省察的で主体的な実践者としての力を培っていく。そうした地道な取り組みが少しずつ蓄積されてきています。

試行錯誤を重ねながら大切に進められてきているそうした取り組みを、より広く伝え合い、じっくり展開を聞き取り、学び合う場を作りたいと思います。

小グループで実践の展開を聴き合います。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていきたいと思います。心に残っている場面。言葉、表情、行為。その時々を感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていきたいと思います。実践の過程をじっくり語り聞きあう場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

●6/23の sessionⅣの参加についてのお願い＝午前午後全日程（8:20-14:00）の参加をお願いします。

ラウンドテーブルでは少人数で互いの実践の長い展開を聴き合い、考え合うことを目的としています。そのため 8:20-14:00 の全日程を 6 人程度の固定メンバーの小グループでの協働探究として進めます。原則として 8:20-14:00 の全日程に参加できるメンバーで進めますので、よろしくお願いいたします。

申し込みについては、福井大学教職大学院ホームページをご覧ください。

Schedule

5/18 Sat 5月 月間カンファレンス A日程 5/25 Sat 5月 月間カンファレンス B日程

6/21 Fri. - 6/23. Sun. 実践研究福井ラウンドテーブル Summer Sessions 2019

7/6 Sat 7月 月間カンファレンス A日程 7/13 Sat 7月 月間カンファレンス B日程

【編集後記】 長い連休が明けたあとは、季節はすっかり夏に向っていくような気配を感じます。今回、はじめて編集を担当しました。前号に引き続き、今年入学された方たちには自己紹介を、2年目、3年目の方たちには新学期明けての学びや、エジプトの方にも寄稿していただきました。それぞれの「いま」がともにある誌面は、この教職大学院の「いま」が写し出されているように見えました。皆さんの学びを今を記録し、読み合う場としてのニュースレターづくりに関われることを嬉しく思いました。（Y）

教職大学院 Newsletter No.122
2019.5.18 内報版発行

編集・発行・印刷
福井大学大学院 福井大学・
奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学
教職開発研究科
教職大学院 Newsletter 編集委員会
〒910-8507 福井市文京 3-9-1
dpdtfukui@yahoo.co.jp